



中部支部

大会トピックスの効果・怖さ

(岐阜大学応用生物科学部) 高見澤一裕

中部支部発足式は、忘れもしない阪神淡路大震災の日、平成7年1月17日に名古屋大学で行われた。当日早朝、岐阜でも震度4の大揺れで飛び起きた。間もなく、徹夜で実験していた大学院生から被害はボンベが倒れてデジケーターが粉々になったことぐらいであるという連絡を受け、その確認をしてから名古屋に向かった。発足式は信州大学繊維学部・岡崎光雄先生と名古屋大学農学部・山根恒夫先生が中心となって名古屋大学シンポジオンで行われたが、地震の影響で新幹線が不通となり、特別講演をお願いしていた当時富山県立大学の山田秀明先生が来られなくなったり、交通事情でかなり混乱したことを覚えている。そして、岡崎先生を初代中部支部長として発足した。現在は会員数322名となり、ここ数年は太平洋側と日本海側に分けて運営を行っている。最近は、石川県立大学の4年制への移行と生物資源学部の発足もあって、日本海側の充実が著しい。

さて、平成21年度からの中部支部運営は、支部長；高見澤一裕，支部編集委員；鈴木徹，支部庶務幹事；中川智行，支部会計；中村浩平の岐阜大学応用生物科学部のメンバーが中心となって行っている（写真）。

これまで支部長は、名古屋大学を除く太平洋側と日本



左より中川，鈴木，高見澤，中村

海側の県に属する大学のローテーションで回してきたが、次回からは名古屋大学もこのローテーションに加わり、愛知県域の一層の活性化に寄与をお願いすることにした。支部としての企画は、企画幹事会を中心に原案を練る。これまでは、市民や高校生を対象とした講演会を中心として成果を還元してきたが、さらに、理科離れを防ぐために、中学生も対象とする体験型実験講座を企画していきたい。ゆくゆくは、中学生・高校生を対象とするバイオテクノロジー入門実験テキストの配布である。支部会員の活性化の方法として、支部例会を立ち上げることを考えている。学会の原点に戻り、手弁当で知的好奇心を満たす場、学問的アイデアの意見交換をする場を大学院生や若手研究者に提供できればと考えている。また、日本海側の充実が著しいので、そのパワーを生かした企画ができればと考えている。

ところで、この稿では大会トピックスについて経験談を披露することにしたい。昨年度、仙台・東北学院大学で行われた大会で、我々が発表した演題「酵素の糖化法による芝からのバイオエタノール生産」がトピックスとして取り上げられた。8月26日の毎日新聞に取り上げられるとともに、なんとYAHOO!のトップニュースに7時14分から11時4分まで位置した。その後、9月26日読売新聞、10月18日英文紙のDaily Yomiuri & DAILY YOMIURI ONLINE、12月5日外務省広報誌のTrends in Japan Web Japan 英語版・中国語版、12月29日の日経産業新聞などその他2紙に、テレビ放映は11月14日（金）NHKワールド News Today 30 Minutesに、その後年が明けて2009年2月24日東海テレビ・スーパーニュース「追跡！エコファイル」、3月7日BBCびわ湖放送、6月24日テレビ朝日・報道ステーション、8月28日テレビ朝日・スーパーモーニングと続いている。ラジオや電車内での映像でも紹介された。こちらが知らずに孫引き的に報道されている場合もあるようだ。

反響が大きかったのは、2009年6月24日の報道ステーションで、視聴率18%という高い数字であるため、放映後の問い合わせが殺到している。この原稿を書いている時点（9月24日）でも問い合わせは続いており、対応にうれしい悲鳴を上げており、すでに200件以上に電話ないしメールで対応した。

報道機関の問い合わせや質問に答えるたびに、きっかけの一つが生物工学会であること、生物工学会大会のトピックスで学会からプレス発表していただいたことを強調しているが、このあたりのいきさつは報道的には面白みがないようで、いつもカットされていることが気に入らない。